

巻 頭 言

ヘルスデータサイエンス学会第3回学術集会のテーマは、「集団から個人へ：医療・健康システムの最適化を実現するデータサイエンス」であった。医療情報システムの専門家である大江和彦先生（東京大学大学院教授）は、特別講演「デジタルツインがもたらすこれからの健康医療」において、臨床医療の空間（現実空間）— 統合医療データ空間（デジタル空間）— 日常生活の空間（現実空間）というデジタルツインを構築すれば、デジタル空間において予測を目的とするデータアナリシスをリアルタイムに行うことによって、新しい医療を実現できるという近未来像を提示された。医療情報システムの最適化（データアーキテクチャ）、標準化・匿名化（データマネジメント）、および最新技術の利用に対する課題を認識することができ、たいへん有意義であった。

本学術集会の5つのシンポジウムのうち、データアーキテクチャ・データマネジメントに関連するものが2つ（マルチモーダルレジストリ、合成患者データ）、データアナリシスに関連するものが3つ（オペレーションズ・リサーチ（OR）、個別化医療、臨床予測モデル）であった。すべてが充実した内容であり、最新の話題について最先端で活躍している研究者が議論する場を提供できたのではないと思う。とくに、ヘルスケアにおけるORが意思決定に関する問題解決を目指していて、それはヘルスデータサイエンスの目標と一致していることから、これら分野間の協同が不可欠であると感じた。ちなみに、日本オペレーションズ・リサーチ学会は、1957年に設立された歴史のある学会であり、当学会内に「ヘルスケアのOR」研究部会が設立されたのは2019年ということである。

最後に、本学会第4回学術集会は2025年11月29～30日に大阪で開催予定であり、最新のテーマについて魅力的なプログラムが提供されている（<https://s-hds.org/>）。多くの方々の参加を期待する。

手良向 聡

京都府立医科大学大学院医学研究科 教授

一般社団法人ヘルスデータサイエンス学会 代表理事

「臨床評価」編集委員